

共働き女性の性別役割分業意識とそれに伴う影響

—話し合いや満足度との相互関係—

宮寄結菜
HS30-0049J

目次

はじめに

第1章 家族形態の歴史

第1節 専業主婦の誕生

第2節 共働き世帯と専業主婦世帯の推移

第3節 逆転の背景

第2章 アンペイドワークの分担

第1節 家事分担の割合

第2節 不平等の理由

第3節 家事が減らない理由

第4節 分担に対する満足度

第3章 インタビュー調査の概要

第4章 インタビュー調査の結果と考察

第1節 実際の家事分担

第2節 女性が持つ性別役割分業意識

第3節 変化する性別役割分業意識

第4節 夫の家事や育児の満足度

第5節 夫婦間の話し合い

第5章 結論

はじめに

本稿においては、共働き家庭として家事や育児を夫婦間で平等に分担している家庭とそうでない家庭の違いについて、特に性別役割分業意識に着目し検討を行う。そのため、共働き世帯として、家事と仕事を両立する女性4名と男性1名にインタビュー調査を行い、性別役割分業意識が家庭内の分業へどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とする。

1 家族形態の歴史

資本主義の発達につれ、経済活動の拠点が家ではなく会社に移り、専業主婦が誕生した。専

業主婦は企業に勤め長時間労働を受け入れる男性を生み出すための都合のいい存在として、全面的に家事を任せられるとともに、労働市場では制約のある存在として押しやられてきた。

その一方で、1997年には、共働き世帯の世帯数が、専業主婦世帯の世帯数を超え、その後も共働き世帯は増加し続け、その差は拡大している。この逆転の背景としては、高等教育を受け、そのスキルを活かし仕事をするを良しとする人生観が女性の中に広がっていることや、男性の給与が無条件に上がることを期待できなくなった家庭の厳しさがあげられる。

2 アンペイドワークの分担

内閣府の調査によれば、有配偶者に配偶者との家事、育児の分担状況についての質問を行ったところ、妻が8割から10割の家事や育児を担うという回答が半数以上となっている。

このような偏りのある分担状況になってしまいう理由として、時間的側面、収入的側面という主に2つの理由から説明されてきた。しかし、筒井によればどちらも大きな影響はないとしている。一方、このような説のほか家庭内における性別役割分業意識に焦点を当てた議論がある。具体例としては性別役割分業意識が強いと女性は家事をすることに対しアイデンティティを維持しようとする等があげられ、現代において家事分担が進まない理由を分析していくためには性別役割分業意識に焦点をあてていくことが必要であると考えられる。また、オークレーは家事や育児に対する考え方については、母親の影響が大きいとしているが、本稿では、こうした女性が持つ性別役割分業意識が、家庭内の

分担にどのような影響をもたらしているかをインタビュー調査から検討を行った。

3 インタビュー調査の概要

インタビュー対象者の選定は、既婚で子供を持つ共働き世帯の女性 4 名と、そのうち 1 名の夫である男性である。

表 1 対象者一覧

	年齢	雇用形態	有給の有無	子どもの数
Aさん	30代前半	正規雇用	有	2人
Bさん	40代後半	正規雇用	無	2人
Cさん	40代後半	正規雇用	有	1人
Dさん	30代後半	正規雇用	有	
Eさん	30代後半	非正規雇用	無	1人

4 インタビュー調査の結果と考察

4.1 実際の家事分担

本調査においては A さんと E さんの家庭は妻が家事や育児を担う割合が高く、あまり分担が進んでいない現状があるのに比べ、B さんと C さんの家庭は比較的家事分担が進んでいる家庭である。

4.2 性別役割分業

性別役割分業をどう思うかという質問や、家事に対する考え方等を聞いていく中で、女性の中には「妻であるから」、「母であるから」という理由で多くの役割を担うことに疑問視しないケースがあるということがうかがえた。

そして、性別役割分業意識に当てはめ理想的な母や妻の姿を作り上げ、その理想像と自身の現実を比較し落胆することがあることも語られた。また、理想的な家事の規準についても語られ、それを作り上げる要因として母親の影響が強くなるようであった。

しかし、このようにして形成された性別役割分業意識は夫が伝統的な性別役割分業意識を持っていない等の様々なきっかけや女性自身が置かれている状況により変化する様子がうかがえた。

4.3 夫の家事や育児の満足度

対象者の女性に夫の家事や育児の分担に対す

る不満はあるかという質問を行ったところ、子どもの幼少期の育児に関する不満は複数あがった。しかし、家事の分担については、対象者全員から「不満がない」、「今のままの分担でいい」という回答が得られた。その「不満がない」という回答をした理由や背景を見ていくと、自身の性別役割分業規範に当てはめ、現状の分担を考えていった満足度と、妻の実質的な満足度の 2 種類があることがうかがえた。そのため、一見「不満がない」と語っていても、一概に家庭内の分担について満足しているとは言い難い現状があった。

4.4 夫婦間の話し合い

夫に対する満足度の内情が多様であることに関し、夫婦間の話し合いに着目し検討を行った。その結果、比較的満足度が高い家庭に関しては、日常的に家事や育児に関する話し合いがあるということがうかがえ、話し合いによって家事分担も柔軟にとらえられていた。それに対し、夫への満足度が低い家庭に関しては、夫婦間の関係性の悪化等を理由に話し合いを避けている傾向にあり、女性の性別役割分業意識を固定させていた。

5 結論

インタビュー調査から、性別役割分業意識の強さ、家庭内の家事や育児の分担状況、夫への満足度、話し合いは相互に関連していく様子がうかがえた。

その結果から、特に女性が持つ性別役割分業意識は様々な影響を受け作り上げられながら、家庭内の分担状況を方向付けているということがわかった。

参考文献

- アン・オークレー1980『家事の社会学』松籟社
 (佐藤和枝・渡辺潤訳) ……………他
 筒井淳也 2016『結婚と家族のこれから 共働き社会の限界』光文社 他